必ず○（まる）がもらえるCLM（個別支援計画）

子育て支援課
発達指導相談員　鈴木幸代

市内の保育園・幼稚園では、医療看護が必要な子を除き、発達障害を含むさまざまな障害などを持ったお子さんを保育しています。

入園面接や保護者との面談、判定委員会などを経て、支援が必要とされたお子さんについては、支援の必要性の程度によってお子さん1人から3人に対し支援員1人の割合で保育を行います。平成28年度は、70人ほどのお子さんに対し30人ほどの支援員が支援を行っています。70人のうち、40人ほどが発達障害と呼ばれる子どもたちですが、支援が必要な程度は個々によってさまざまです。この子たちの保育を行う際には、「CLM」という個別支援計画を立てています。

「CLM」とは、「チェック・リスト・イン三重」の略で、三重県立小児心療センターあすなろ学園で開発された個別支援プログラムです。このプログラムでは、何項目かのチェック項目から成り立っており、項目の中で子どもの困り感の強いものや生活の中で危険度が高いものを取り出し、どうしてそうなってしまうのかを分析します。そして、長期指導計画を立て、そこに行くまでのステップとして2週間程度で達成が見込める短期指導計画を立てます。

発達障害を持ったお子さんは、注意されたり叱られたりすることが多くなりがちですが、このプログラムでは必ず○（まる）がもらえ、本人が自己肯定感を持って園生活を送れることが最大の特徴です。今のところ市内の各園では、支援が必要なお子さんの大半が年度末には支援がなくてもクラスの中で集団生活ができるようになったり、支援の必要性の程度が軽くなってきています。しかしこうしたお子さんたちは、環境の変化に弱い面を持っていますので、次のステージにどうつないでいくかが大きな課題でもあります。

保護者の方は誰しも自分の子どもが発達障害だと受け入れたくないものと思います。しかし、発達障害はその子を取り巻く周りの理解が大切です。まずは保護者の方がお子さんの困り感に気付き、それを受け入れ、適切な支援を受けていくことがお子さんにとっても望ましいと考えています。

自信を持つことが次へのステップ

土岐津小学校特別支援教育担当
主幹教諭　安藤かぐみさん

小中学校では、学校生活で集団の中での学びづらさや、困り感がある児童・生徒に対し発達段階に応じた支援や教育をしています。

市内の小中学校には、知的障害や自閉症などの児童・生徒を対象とした特別支援学級や、市内の小学生を対象に、表現が苦手であったり発音がうまくできない児童に対しての「ことばの教室」、学習や生活の中での困り感がある児童が、社会性や必要なスキルを学ぶ「なかまの教室」と呼ばれる通級指導教室もあります。

特別支援学級や通級指導教室では、児童・生徒が学習や生活の中での個に応じた支援によって、出来なかったことが身に付くように、また自分に自信が付き社会で自立できることを目指して支援しています。

私は日頃から、児童や生徒の問題と思われる行動を止めさせるだけの対処ではなく、その行動の原因や背景を周りの大人がしっかりと見極めて、環境を整えてあげることが大事であると思っています。結果ばかりを求めるのではなく、その子が頑張っている過程を認めてあげたいし、認めてあげてほしいと思います。

そのような支援を続けていく過程で、子どもたちは少しずつ変わっていきます。例えば挨拶ができなかった子が「おはよう」と声を掛けられるようになります。字がしっかり読めるようになったことで、自分に自信が付いて「勉強が楽しい」と話してくれる子もいます。落ち着きのなかった子が落ち着いて話を聞けるようになったり、人前で話すことが苦手だった子が日直当番で話せるようになったりなど、ゆっくり、ゆっくりですが進歩していきます。そんな子どもたちの姿を見ると喜びもひとしおです。やはり周りの誰かに認められること、認めてもらえる場があるからこそ、その子の自信となり次のステップにつながっていると実感します。

これからも私たち教員は、児童・生徒が「頑張ればできる、自分は進歩しているんだ」という気持ちを持てるように日々接していきたいと思います。そして児童・生徒が、自分に自信をもって社会に羽ばたいていってほしいと思います。

小学2年生の自閉症のお子さんをもつ母親にお話を伺いました

息子が1歳になる頃、言葉の遅れが少し気になり始めました。でも、自分にとっては初めての子ども。周りの子と比べて少し遅いのかな？程度にしか思っていませんでした。

1歳半を迎える頃、市の保健センターでの定期健診を受けた際、会場に来ていた療育センターの先生から、センターへの通所を勧められました。しかし、その時はまだ小さいから、様子を見ようという気持ちで通所するには至りませんでした。

日に日に不安も大きくなる中、ある日子どもにクレーン現象（※何かして欲しい事を言葉で伝えられず、近くの人の手を引っ張って対象物の所まで連れていく行動。例えば、口では「テレビをつけて」と言えないので、大人の手を取ってリモコンに近づけるようなこと）が見られるようになりました。症状を調べると、発達障害の子どもに見られる特徴であることを知り、この時点で療育センターでの専門医による発達相談を受けることを決め、その結果、自閉症との診断を受けました。息子が2歳半になる頃でした。

当然、ショックではありました。でも、うすうす自分でも気づいていたこともあり、今思えばここでしっかりと区切りをつけられたことがよかったと思います。「じゃあ、この子のためにこれからどうすればいいんだろう。何が出来るんだろう」と、スタート地点に立つことができたと思います。

療育センターでは大変お世話になりました。今ではこの時の経験が本当に息子のためになっていると感じます。

感情の発達に役立つような絵本の読み聞かせを丁寧にしてくれましたし、なにより子どもが飽きないように楽しませてくれたことがありがたかったです。本人も本当に楽しそうに通っていました。

センターだけでなく、その後に通った保育園・幼稚園などで関わった先生方も、他の子どもと同じように自分の子どもに接してくれました。

「今日○○ちゃん、何々したんですよ。とっても可愛かったですよ」と言ってくれたり、しっかりと抱きしめて愛情を注いでくれました。

やはり自分の子どもは無条件にかわいいと思えますが、他人から見たら「変なのではないか」という不安がどうしてもありました。そういった不安を拭い去ってくれたのが本当にありがたかったです。

また、言葉で理解することが難しい息子に対して、例えば、整列するときに床に足跡のマークをつけるなどの視覚的に分かりやすい配慮をしてくれたことも助かりました。

自閉症の特徴として、感情を理解すること・表現することが苦手というものがあります。

しかし、丁寧に何度も説明してあげると、時間は普通よりも長くかかるかもしれませんが、理解してくれる時もあります。行動に関しても、何度も何度も繰り返して教えてあげることで、できるようになります。とにかく根気は要りますが、積み重ねが大事なんです。

息子には、得意なこと、苦手なこと、それぞれ話してあげるようにしています。今はまだ本人は感じていないようですが、いつか壁にぶつかるときが出てくるだろうと思います。「なぜ、自分はできないんだろう」と。

親として、いつかは自閉症であるということは伝えてあげないといけないと思っています。

「あなたは脳の障害があるために人よりも少し苦手なことがあるんだよ。大丈夫。おかしなことではないんだよ」と。人とペースは違うかもしれない。でも社会の一員として、将来立派に生活していけるように育てていく義務があると感じています。

自分の子どもについて、周囲に対して理解を強く望んだことはありません。「変わっている。あの子は発達障害だからできなくても仕方がない」そんな風に思ってほしくはないんです。特別扱いするのではなく、例えば“左利き”などと同じように、脳のタイプの違いとか、一つの個性として捉えてもらえればと思います。

ただ、知識として発達障害というものがあること、どのような特性があるかということを知っていてほしいという思いはあります。

社会の中で発達障害を持つ人と関わる機会は少なくないと思います。お互いを知り理解する、その体験を幼少期からすることはとても良いことだと思います。

最後に、今自分のお子さんへ少しでも不安を感じている方へ。

自分の子どもはそんなことはないと思う気持ちは本当に分かります。自分も初めは気付かなかった。

でも、まずは勇気を出して身近な先生に相談してみることをお勧めします。しかるべき判定をして、結果そうでない可能性ももちろん大いにあります。でも、もしそうであった場合、それをいち早く見つけ認めることは、自分にとっても、何より子どもにとっても最善の判断になると私は思います。

こちらのお母さんに、より詳しいお話を伺いたい、相談してみたいという方は、子育て支援課（内線161）までご連絡ください。

土岐市は途切れのない支援を目指しています。お子さんの様子で少しでも気になる点があったり育てにくさを感じたりしたら、気軽に市の担当機関にご相談ください。